

タイトル	長い中間欠損に自家歯牙移植を応用したケース症例																																																
英文タイトル	A case of Konuskrone which used autotransplantation.																																																
発表年月日	2011年12月7日	救歯会例会	山本一宇																																														
初診年月日	1999年9月7日																																																
患者	54歳女性																																																
主訴	ブリッジが取れた。																																																
初診時歯式	処置時歯式																																																
<table border="0"> <tr> <td>5</td><td>3</td><td>2</td><td>1</td> <td> </td> <td>1</td><td>2</td><td>3</td> <td>6</td><td>7</td><td>8</td> </tr> <tr> <td>8</td><td>7</td><td>5</td><td>4</td> <td>3</td><td>2</td><td>1</td> <td> </td> <td>1</td><td>2</td><td>3</td> <td>4</td><td>5</td><td>7</td> </tr> </table> EichnerB2	5	3	2	1		1	2	3	6	7	8	8	7	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	7	<table border="0"> <tr> <td>5</td><td>3</td><td>1</td> <td> </td> <td>1</td><td>2</td> <td>A</td><td>8</td> </tr> <tr> <td>8</td><td>5</td><td>4</td><td>3</td> <td>2</td><td>1</td> <td> </td> <td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>7</td> </tr> </table> EichnerB3			5	3	1		1	2	A	8	8	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	7
5	3	2	1		1	2	3	6	7	8																																							
8	7	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	7																																				
5	3	1		1	2	A	8																																										
8	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	7																																					
現在歯式	<table border="0"> <tr> <td>5</td><td>3</td><td>1</td> <td> </td> <td>1</td><td>2</td> <td>8</td> </tr> <tr> <td>8</td><td>5</td><td>4</td><td>3</td> <td>2</td><td>1</td> <td> </td> <td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>7</td> </tr> </table>			5	3	1		1	2	8	8	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	7																										
5	3	1		1	2	8																																											
8	5	4	3	2	1		1	2	3	4	5	7																																					
診断	EichnerB3 カリエスタイプ 慢性辺縁性歯周炎																																																
初診時の特徴	カリエスリスクが高く二次ウ蝕が認められる。 上顎残存歯の多くは失活歯で根尖病巣が多く認められる。																																																
患者の特徴	家庭で障害者の息子の介護に追われ、生活に忙しく腰痛がある。																																																
治療の問題点	保存不能歯を抜去すると、左上に長い中間欠損を生じ、受圧加圧要素のバランスが崩れる。																																																
補綴設計	上顎はほとんど失活歯なのでワンユニットのコーヌス義歯を目指した。また長い中間欠損には自家歯牙移植を応用した。																																																
術後考察	左上6番に右上2番から自家歯牙移植して受圧加圧要素の改変を試みた。移植歯は11年後に歯根破折で失ったが、十分機能をしたと思っている。また移植歯は根管拡大を根尖部まで大きく拡大し、歯根破折を誘発してしまったと反省している。																																																
今後の予測	左上6部移植歯を失って長い中間欠損を生じたが、年齢も66才なので比較的安定的に推移していくのではないかと考えている。																																																
発表理由	左上6番の口蓋根と思われる残根は上顎洞に近接していて、移植部としては不向と思われた。しかし偶然にも根形態の似た保存疑問歯右上2番が存在したため、あえて自家歯牙移植を決行し、長い中間欠損に対応した。受圧加圧条件の改変を試みた移植歯は移植後11年で歯根破折にて自然脱落してしまったが、患者さんが移植歯を失ってずいぶん噛めなくなったとのクレームに、十分機能していたことは確認できた。しかしまた現在再度生じた長い中間欠損の対応や初診時の一連の治療方針等について、経過観察で生じた結果から各先生方のご意見をお聞きしたいと思っております。																																																